

響 風

Hibiki Winds



出典：駅のスケッチ（森 惣介著）より

あしや句会

第 4 号

はじめに

また一年が過ぎ「響風」第四号を発刊することになった。平成二十年は十日恵比須の「開運御座」で始まり、冬風の博多湾を見下ろしながらの忘年句会で締めくくられた。月一回の吟行だが、その一日は、どんなにおしゃべりをして最後には十句の俳句作りに集中する。それ故に吟行句を後から読めば、まさまじとその日が甦ってくる。二月は宮地獄神社の大雨の中の節分祭、三月は室見河畔の氷雨の中のシロウオ漁吟行。一人では早々に帰ったであろう状況でも、冷え切った体を温めながらの吟行句会は、後から笑い話となって語られる。日にちが決まればどんな天候だろうと決行される吟行は、生もののように活きのよい句を生み出す。好条件の吟行から佳句が生れるとは限らないし、悪条件の吟行ほど印象に残る。俳句作りは何とも面白いものだと思う。

貝寄風の昇先生を囲んでの句会は、京都の「傘寿の祝いの会」(二泊)、琵琶湖の「夏行」、京都大原の「忘年句会」と一年に三回行なわれた。まさしく俳句三昧の二泊三日で、世の中の出来事を知ることもなく、目にしたものを詠んでいく。毎回昼十句、夜十句の一日二回の句会が行なわれるのだが、京都大原ではさらに夕食後に七句、それも一時間後に句を集めると言う。さつそく宿の外に出て三十分の吟行。寂光院のある寂しい山里には、散り残った紅葉が外灯に照らされ、川音のみの静けさの中に月が昇り、昴がうすうすと見える。その景色の中から心に留めたものを、残りの三十分で俳句にしてしまう。締め切りの九時を過ぎてようやく解放され湯に浸る。思いを五・七・五になかなか出来なかつた頃を思い出し、今は言われるがままに、当り前のように受け入れている自分に驚く。

見たもの感じたものを短時間で五・七・五にする力は、月々の吟行句会で養われている。後はどのように感じ、どのように作り上げていくかが一番の問題であるが、これは未知数としか言いようがない。この一年皆で吟行句会を楽しむことができたのが何よりである。

平成二十一年二月

江本 由紀子

響風 第四号 目次

■はじめに

■吟行記

第三十九回	十日恵比須神社	1
第四十回	宮地嶽神社 節分祭	5
第四十一回	室見川・愛宕神社	10
第四十二回	妙見神社・円通寺	14
第四十三回	南蔵院	18
第四十四回	太宰府天満宮・光明禅寺	23
第四十五回	到津の森公園	28
第四十六回	門司港と山宿	32
第四十七回	大濠公園周辺	36
第四十八回	紫川・小倉城周辺	40
第四十九回	竈門神社・四王寺山	44
第五十回	百道浜・シーホーク周辺	48
■自選句		
二十〇～二十一	平成十九年十二月～二十年三月	52
二十二～二十三	平成二十年四月～七月	54
二十四～二十五	平成二十年八月～十一月	56
■あとがき		

吟 行 記

(第三十九回～第五十回)

第三十九回吟行記

平成二十年 一月十日(木)

参加者 佳与子 節子 光子 由紀子

十日恵比須神社 (福岡市東区)



年の初めに景気の良い「大当たり」の声を聞こうと去年と同じ「十日恵比須神社」に参詣した。JR鹿兒島線の吉塚駅に十時集合。駅からまっすぐ歩くとすぐに「東公園」がある。広い公園の一番奥まった所に神社があるのだが、入口からあふれるように露店が軒を連ねている。その数三百とも四百軒ともいわれ、神社に近づくほど縁起物が置かれている。すでに参詣を終え福笹を手にした人とすれ違ふ。十日は「正大祭」。駅に置いてあった「十日恵比須詣り」のパンフレットを見ると、福引は午前六時から深夜一時までとある。「初えびす」「宵えびす」「正大祭」「残りえびす」と四日間昼夜を問わず賑わう大祭は、名物の福引を始め、祈願祭や茶席、川柳大会、民踊などの諸行事、芸妓さんの「かち詣り」などがあり商都博多の風物詩にもなっている。

大当り大当りの声初恵比寿

節子

参詣の静かに混める初恵比寿

由紀子

参道の人にせばまり初戎

光子



去年も「正大祭」の十日に参詣したのだが、その時「開運御座」といって、白丁(はくちよう)を着て、拜殿でお祓いを受けた後、直会膳(なおらひぜん)と福引の御座があることを知る。次回はこの「開運御座」にしようと言っていたので、神社に着くとすぐに受付で初穂料を納め白丁を着て順番を待つ。参詣の列、福引や受付案内の声などで拜殿前は大賑わいであるが、拜殿の中に入ると案外静かで、本殿を前にと神聖な気持ちになつていく。お祓いを受け、一年の開運、商売繁盛、家内安全、無病息災の御加護を仰ぐ祈願をし、お神酒と昆布するめに入った小さな袋を頂く。次に開運殿の大広間の席に着く。ここでは白木の折敷(おしき)

にお茶菓子とお抹茶、蛤のお吸物に一口ナスが出され、持ち帰り用の箱も
 のが各人の前に置かれる。(鯛や紅白饅頭の形をした蒲鉾、十日恵比須鈴、
 繁昌海苔、昆布するめなどが入っていた)

福引の声の祝詞に重なりて

光子



いよいよ名物の福引。

お世話人の一人が籤箱
 を回し、もう一人が箱
 の中から籤棒を引く。

「当りー」「大当りー」
 と声高々に縁起物を読
 み上げる。巫女さんた
 ちが順番に引き当てた
 縁起物を配っていく。

光子さんと由紀子は、
 もっと料理に精進せよ
 とのことなのか、この
 一年食べることには事
 欠かないということな

のか「大しやもじ」が当り、節子さんは「おすがた」という桐箱に入った
 「えびす像」、佳与子さんは縁起物がたくさん付いている「大熊手」。佳与
 子さんの「大当りー」の声は一段と高かったような気がする。なごやかな
 御座の締めは「えびす手一本」の打ち入れ。「ヨー」という掛声とともに
 掌を上にあげて拍手すると何だか気持ちがいい。引き当てた縁起物や直会

膳の持ち帰り用の縁起物に福笹を添えて御座を後にする。この「開運御座」
 は深夜0時まで続く。

佳与子さんの大熊手は大きすぎて持ってきた袋に入らない。背の高い節子
 さんが、すれ違う人の顔に当たらないように掲げ持って歩く。拝殿前の福
 引所では「二万五千人目の福ー」と声高らかに当たった人に何やら渡して
 いる。福引を引いた人の数をカウントしていたことに驚くが、福を引き当
 てた人のえびす顔を見るのもうれしい。

初恵比寿袋に入らぬ大当り

由紀子

引き当てし大福笹に人より来

佳与子

二万五千人目の福とや初恵比寿

佳与子

威勢よく十日えびすの手一本

節子

裏参道から昼食予定の「レガロ」に向かう。背広姿の男性たちが、大当
 りの熊手より二回りほど大きな熊手を抱え歩いている。予約のお祓いを受
 けた大熊手をこれから会社に
 飾るらしい。商売繁盛・繁
 盛！！

昼食を済ませ神社に戻る。
 人はさらに多くなっている。
 参詣の列は長く続き、福引の
 声も続いている。福笹や縁起





物を手にしている人、これから参詣する人など公園内は賑わっている。露店の道から少し離れた元寇ゆかりの「亀山上皇」像の近くまで行く。像は階段のある小山に建てられているので、今通ってきた露店の並ぶ道や人がよく見える。前方に猿回しの口上が聞こえてきたので近づいてみる。猿曳の顔は猿に似ている。いつも一緒にいると似てくるものだろうか。長々と続く口上につまらなそうに横を見ている猿に侘しさを覚える。

猿曳の口上長し芝に待つ

光子

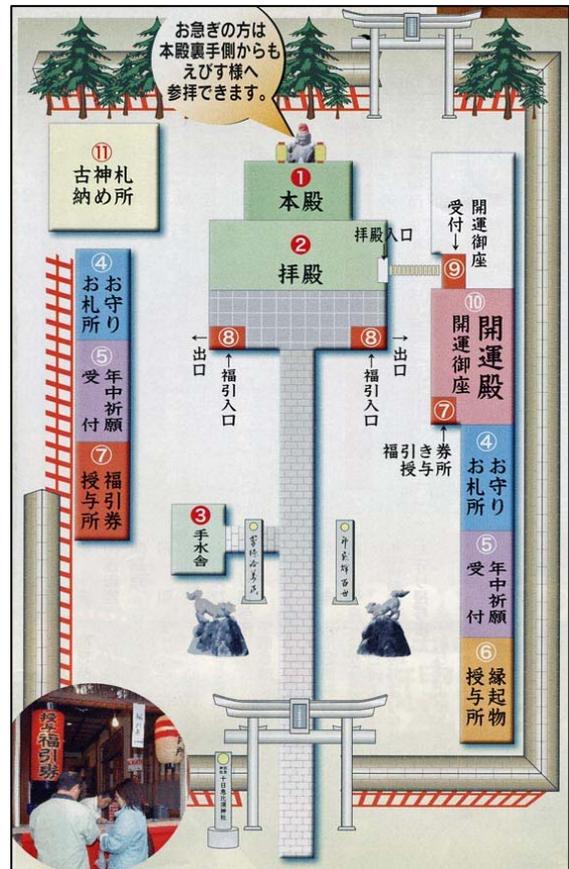
口上に佇つ曳猿の浮かぬ顔

節子

気の乗らぬままに曳猿宙返り

節子

去年と同様、目の前の県庁十一階の展望室に上がり、「十日恵比須祭り」や博多の街をしばらく眺めてから喫茶室にて句会。座った席も去年と同じ。帰り際に「今母県庁の展望室。」とメールを送った息子が、五時すぎ八階の仕事場から展望室に来る。社宅でお世話になった頃と全く変わらないおば様方に囲まれ、照れながらもうれしい再会。元氣パワーを皆からいただいてすぐに仕事場に戻る。今年一年の家内安全、無病息災を願ひ十日恵比須祭りを後にする。



【十日恵比須神社全体図】



【日蓮上人像】



【H20年2月号HPのトップページ：大当たりの熊手】



【HP トピックス掲載：宮崎宮の寒牡丹】

第四十回吟行記

平成二十年 二月三日（日）

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

宮地獄神社 節分祭 （福津市）

「櫛田神社 節分祭」の押し競まんじゅうのような豆撒きに今年も参加してみるのもよいが、豆撒きは各地の神社で行われているだろうから調べてみる。役に立つのが十日恵比須神社の「開運御座」で戴いた神社暦。福岡県内の主だった神社の神事が書かれており、節分祭は十ヶ所ほど載っている。その中から「宮地獄神社 節分祭」を選ぶ。初詣や花菖蒲吟行で訪れた宮地獄神社は、広い境内を持つ県内有数の神社。節分祭も賑やかに執り行なわれるだろうし、「奥の宮八社めぐり」や木々に囲まれた広い境内を散策することもできる。句材の多い神社吟行を楽しむつもり。



二月三日の節分の日は日曜日だが、理解ある家族の了承のもと北九州と博多の中間にあるJR福岡駅に十時十分集合。生憎前日から雨が降りだし、空は分厚い雲に覆われている。食事処の場所や時間を考えると、十一時より十三時の豆撒きに参加したほうがいいだろうと、先に食事処「大力」のある宮地浜へタクシー二台に分乗して吟行に行く。五分ほどで着くのだが歩くには遠い。

玄海灘に面した宮地浜は海水浴場にもなっているきれいな浜で、ゆるやかな



長い砂浜のカーブが美しい。右に津屋崎漁港左に新宮漁港が見え、沖には小島が浮かんでいる。この辺りは希少動物のカブトガニが生息していたり、ウミガメの産卵の地ともなっているらしく、浜を汚さないようにと看板が立てられている。看板の管理者は「福津市うみがめ課」。「うみがめ課」のネーミングが面白い。希少動植物の保護を含む環境・清掃・資源リサイクルを担当しているらしい。ハンブル文字のポリタンクなどが打ち上げられてはいるがゴミは少なく、舞い降りて打ち際に並ぶ鷗たちが時折歩くのみの静かな浜辺。二月の小雨の浜辺には散歩する人も大もいない。

下萌や浜への辻に地藏尊

光子

かもめみな海に背を向け浜二月

真理子

足跡のみな浅かりし春の浜

節子

遠く新宮側の浜辺に白装束の一团がいる。何やら神事を執り行なっているようだ。近づいて見ようと歩いていくが、見た目より距離があり途中で諦める。霧雨が小粒の雨となつて降ってくる。白装束の一团は浜から引き上げ、沖に見えていた小島は隠れ、空と海の境がだんだんなくなってくる。



本殿の中では神事が始まっているようだが、豆撒きには間に合う。小雨から大雨になった境内に、傘を差した人たちが豆撒きを今か今かと待っている。静かだった本殿の中がざわつきはじめ、大綱の奥に袴を着けた善男善女が並ぶ。天気が良ければ本殿横に特設会場を作って大

海の家らしき建物のそばにサーフボードが並べられている。その軒先に雨宿りしていると雨は段々本降りとなり風もでてくる。「大力」の開店まであと十五分。店まで歩き、店先の長椅子に座って待つことにするが体は冷えきっている。ようやくドアが開き部屋に通される。新鮮な魚が安く食べられる人気店なので次から次にお客が入ってくる。暖房の入った部屋で定食のアラカブの大きさに満足しながら、あれやこれやと話しているうちに十三時。大急ぎでタクシーを呼び神社本殿横の駐車場に降ろしてもらう。

うみがめの浜に追儼の神事かな 真理子

玄海へ向けし追儼に波の音 真理子

ひとすじの煙草屋に下萌ゆる 真理子



に拾えない。足元の踏み砕かれた豆が気になりつつ、ようやく胸に飛び込んできた袋入りの福豆を一つ手にする。

勢の人達に撒くようであるが、今年は大綱の奥からのようだ。いよいよ豆撒きの始まり。傘をさしては危なく拾えない。コートフードをかぶる人、そのまま濡れている人。「福は内」「鬼は外」と雨音にかき消されそうな声が大綱の奥から聞こえてくる。「櫛田神社」と同じと思っただが、豆がそのまま撒かれている。その中に袋に入った福豆が混じる。初めは遠巻きに眺めていたが、傘を置いて人の中に入って拾う。といっても飛んでくるのは直接の豆。頭や顔に雨粒と一緒に落ちて降りかかる。少しずつ前に行っても豆は大綱に当たってすぐ下に落ちたり、思うよう

大荒れの子報的中節分祭 節子

雨傘のひしめきあって年の豆 聖子

段々に声の高まる鬼やらい 聖子

膝までもジーンズ濡れて鬼やらい 真理子

大網の奥より飛び来福の豆 由紀子

降る雨の下に飛び交ひ年の豆 佳与子

ぬかるみに拾ふ小袋年の豆 佳与子



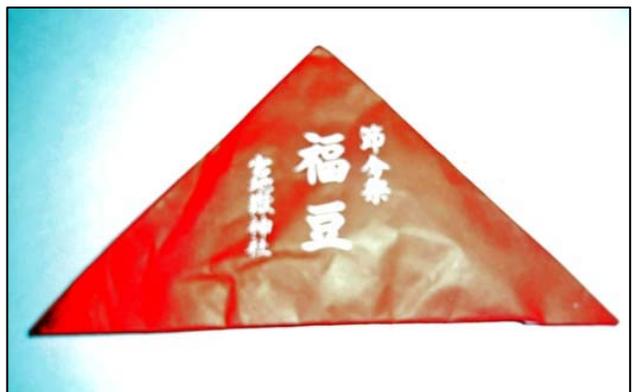
に小さくセブンイレブンのマーク。楼門の脇で「恵方巻き」を売っている。

恵方巻き売り子は鬼の着ぐるみで 由紀子

雨の中の豆拾いは大変だと実感。お守りやお札の授与所に赤い袋に入った福豆が売られている。一つ購入。福引券がついているので引換所で開くと「福豆」の文字。ようやく「福来る」の気分になり福豆をもらう。本殿脇から入ったので、本来の入口である楼門を見ていなかったが、「ますます繁昌」の枡が据えられている。枡を潜って階段を降りようとすると鬼の着ぐるみの若い男性が参拝客に声をかけている。雨に濡れながらご苦労様と思ったが胸

参道沿いの茶店の暖かい湯気に引き寄せられるように中に入る。土産物の並んでいる所にテーブルと椅子が置かれストローが焚かれている。暖をとりながらの松ヶ枝餅とお茶にようやく一息つく。濡れたバックやコートから拾った福豆と買った福豆をテーブルに取り出してみると、拾った福豆の中に紙がはいっている。なんと福引券。豆を拾ったのは光子さんと二人なので、二人でそれぞれ開けてみると、光子さんの紙には梅の印、由紀子の紙には「開運」の文字。疲れ気味の体が俄かに元気を取り戻す。一月の恵比須神社の縁起物が浮かんでくる。雨の中長い階段を上ってまた戻ることを考えると少し億劫だが、何たつて「開運」。そのまましておくのは惜しい。皆の好意に甘えて二人で戻る。引換所では何人もの巫女さんが次々に商品を渡している。勢いよく「開運」を差し出すと、巫女さんにはこりともせず、下の箱からドラエモンの絵の「うまい棒」二本を置く。一瞬何がおきたのかわからない状態で、「開運」と「うまい棒」が結びつかない。ジュース一本を手にした光子さんと「うまい棒」を手にした由紀子。人は自分の想像を超えた驚きに対しては言葉がなく、泣くか笑うしかないが、「開運」は大いに笑わしてくれた「福」なのかもしれない。

皆の待つ茶店に戻りタクシーで福岡駅まで行く。駅前に小さな喫茶店を見つけ句会。外に出ると雨は止んでいる。北九州組は駅の上り線、福岡組に



は光子さんが加わり下り線へと向かい解散する。福岡組は電車から美しい虹が見えたらしい。大雨の後の清々しい「福」をいただいたようだ。

立春の虹つき抜けて汽車のくる 真理子

虹かかる一軒の家訪ねたく 節子

自宅に帰り着いてしばらく「うまい棒」を眺めていた。宮地嶽神社とドラエモンのお菓子。ギャップの大きさに閃いた。これは教訓ではと。「うまい棒」を掴む手に「うまい話には気をつけよう」と神さまが立春を前に教えてくれたような気がする。これも「福」なり。



【宮地嶽神社表参道の鳥居】



【食事処「大力」のあらかじめ定食】



【宮地嶽神社の日本一と言われている「大太鼓」・「注連縄」・「大鈴」】

■ 主な名所 ■ 奥の宮八社 ■ 民家村自然公苑



【宮地嶽神社境内案内図】

第四十一回 吟行記

平成二十年 三月四日(火)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子
室見川・愛宕神社(福岡市早良区・西区)

福岡市の副都心・西新の西側に室見川が流れている。室見川と言えば白魚漁。三百年も続く伝統的な漁法は、博多の春の風物詩になっている。この時期毎年のようにローカルニュースで放送されるのだが、スーパーの鮮魚コーナーでビニール袋の水の中で泳ぐ白魚しか見たことがない。こんなに近くで漁をしているのに、白魚漁吟行を思い付かなかつたことが不思議なくらいだ。室見川の白魚(素魚)はシラウオ科ではなくハゼ科の別種と



歳時記に書いているが、何科であろうと俳句作りには構わない。築を仕掛けている川の様子を見ることができればよし、実際に築で漁をしているのを見ることができれば尚よしである。

今年の福岡の冬は大雪が降ったり氷が張るほどではないが寒い日が続いている。先月の節分祭の大雨のこともあるので天気のこと気がななつていたが、二日の夜から激しく雨が降り出し、予報でも大荒れの天気が一三日続くという。予報の中で吟行日の四日も朝から雨。雨と寒さ対策をして博多への電車に乗り込む。十時三十分地下鉄室見駅集合。

佳与子・由紀子の乗った電車が事故の影響で少し遅れたが、無事皆と合流。さっそく室見川



へと向かう。室見の手前の西新に学生時代住んでいたのだが、地下鉄の開通、都市高速、百道地区の住宅開発など、福岡市でもこの辺りが一番変貌を遂げたのではないだろうか。七十年代の室見周辺はのんびりとした住宅街だったのにも思いつながら、ビル群の下を見知らぬ街に来たかのように皆に付いていく。すぐに河川敷に着く。築がある。川の真ん中にきれいに仕掛けられた築には等間隔に杭が打たれているが、その杭に鴉が一羽ずつとまっている。傘を差しても濡れるほどの雨に人影はない。

草青む河畔に雨の強かりき

聖子

手を振れば鴉飛び来る上り築

節子

対岸に白魚漁の小屋見えて

節子

河川敷は整備され、散歩コースとして絶好な場所だ。木々が植えられ、ユリカモメ、鷺、鴨などの野鳥も多い。博多の良さは、ミニ東京と言われるだけの情報の速さや芸能文化の根が張っていることに加えて、この自然の豊かさが大きい。目の前の川は豊かな水量で博多湾へと注いでいる。橋を渡ると、もう一つ築が見える。近づいて見ると築に仕掛けられた籠が皆



上げられている。降りしきる雨に漁は休みだろうが、傍の「室見川しろウオ組合」と書かれた立て看板のある小屋を覗いてみる。炬燵やストーブ、生活用品が少々置かれている。中に築番がある。「シロウオ販売しております」に今日も売ってくれ

るのかと聞くとオーケーの返事。夜まで大丈夫らしいので、真理子さん、光子さん購入。川の中の生簀から掬い上げ、小屋の中でビニールの袋に酸素を注入にて出来上がり。熟女達に囲まれて一合枡から溢れるほどの白魚を入れてくれる。築を見るだけと思っていたが、思いがけず実際に捕れた白魚を見ることができたのが嬉しい。白魚といえば「おどりぐい」が有名だが、この河畔にある料亭「とり市」が発祥の店らしい。川に面した部屋から漁を見ることが出来るように専用の小さな築が仕掛けられている。それらを見ながら白魚の袋を下げて室見川を後にする。

引き潮に白魚の籠上げてあり

光子

漁小屋に声かけてみる春炬燵

真理子

漁小屋に番する一人春炬燵

光子

白魚の一日上らぬ漁小屋に

節子

白魚を一合枡で掬いあげ

佳与子

裏返す網の白魚枡に受け

真理子

白魚の袋酸素を吹きこまれ

佳与子

室見川を挟んで区が分かっている。東側が早良区室見、西側が西区愛宕。愛宕神社まで歩いて行く。由緒ある神社で桜の名所でもあるが、境内は愛宕山の頂上にあるので、博多湾、福岡ドーム、タワーなどの景色を見下ろすことができる。若者にも人気の場所になっている。すぐに山の裏手にある食事処「よひら」に行く。百七十年前の家を釘を使わず移築したものと云うだけあって、大きな梁のある高い天井の店内は温もりがある。お雛様の器の入った籠盛の膳も美味しい。真理子さんがお店の人に頼んで白魚を器に移してもらおう。



解き放つ白魚鉢に生き生きと

佳与子

白魚の上に白魚跳ねてをり

真理子

白魚の時折目玉光らせて

由紀子



ブに暖をとり、甘酒や愛宕餅で一息入れて句会。

もう一度愛宕神社本殿まで戻る。境内から博多湾や百道浜の福岡タワーなど市街地を見下ろす。雨は降り止まず、雷も鳴り出したので階段を下りて茶店に入る。茶店の横は鷲などの営巢の森になっっていて、番らしい青鷲が何羽も止まっている。室見川から愛宕山に登る時、この森の中を鳥の鳴き声を聞きながら歩いてきたのだが、これほどの鷲がいるとは・・・。時折大きな羽をひろげてゆっくりと飛ぶ。景色は良いが、体が冷え切っている。ストー

博多湾望む神社の春灯

節子

波尖る川に轟き春の雷

真理子

雨の宮下りて茶店の花ミモザ

光子

濡れし靴ぬぎて茶店の春暖炉

真理子

営巢の森育てる春の雨

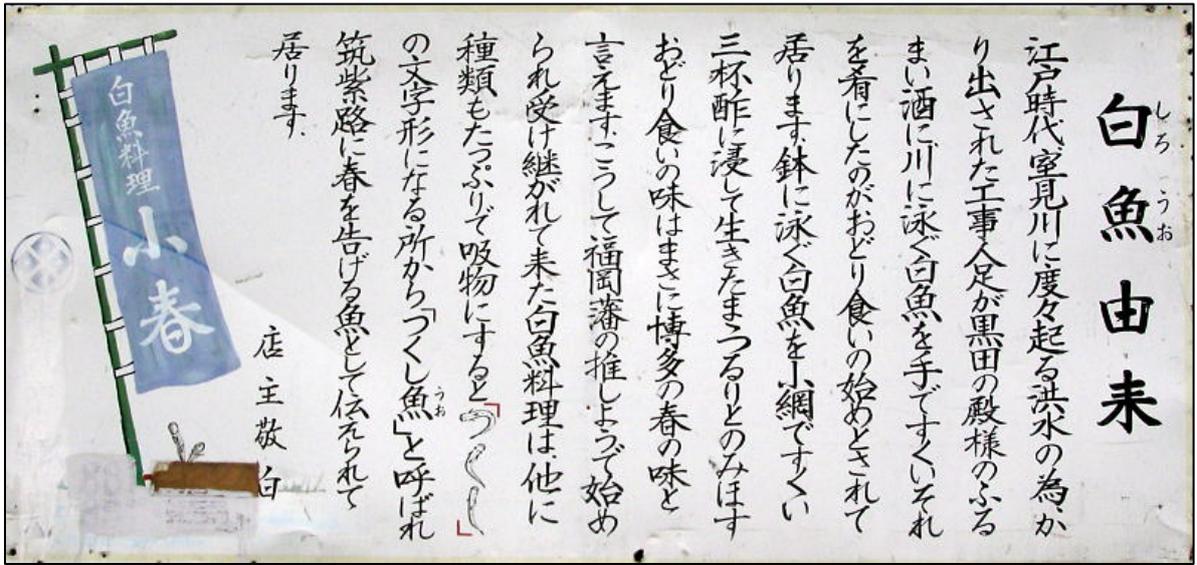
由紀子

雨いつか名残の雪となりて降る

聖子

それぞれに家路につく。雨は場所によって雪だったようで、車を自宅の駐車場に入れるまで雪と格闘した人あり、雪の高速バスで予定時間より長くかかった人あり。各人積もっている雪にびっくり。寒いはずだ。戴いた室見川の白魚は、自宅に持って帰っても生きており、お吸い物と卵とじに。一日の吟行を白魚で美味しく頂きました。





【上り築】



【ゆりかもめ】



【愛宕神社の青鷲】

第四十二回吟行記

平成二十年 四月三日(木)

妙見神社・円通寺(北九州市・小倉北区)

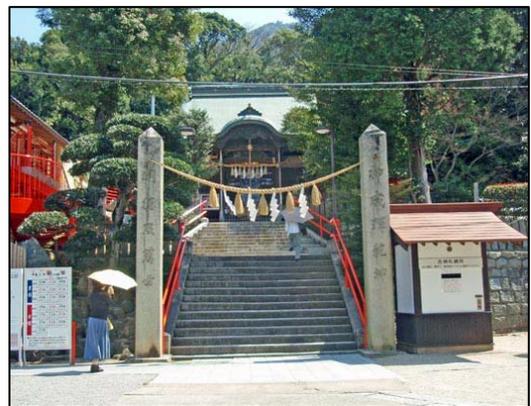
参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

近年の温暖化で桜の開花が年々早まっていたが、今年は二月三月と寒い日が続いたせいも、開花宣言が三月二十四日と出たものの近くの桜は全く花をつけていない。三月二十五日の佳与子さんとの下見でも、吟行予定の足立山麓の桜はチラホラと言うほどもなく、一つ一つと数えるほどの花。吟行日の開花状態が気になるところだが、三分は三分の、五分は五分の風情ありで詠めばよし。そう思っ吟行日を迎えたのだが、桜の開花の醍醐味とでもいおうか、一週間であつという間に咲き満ちる。

四月三日小倉駅前のバスセンターに十時半集合。すぐに西鉄バスに乗り、



約二十分程の黒原一丁目で降りる。この辺りは足立山(標高五九七m)の麓で、桜、新緑、紅葉を楽しむことができ。バスを降りてすぐ見える「平和公園」の桜は、一週間前とはうって変わって満開に近く、花筵があちこちに敷かれ、屋台も何軒か準備している。公園の奥まったところに忠霊塔が青空に高々と建っている。やっぱり桜の満開は美しい。枯木立から一遍に桜の苑になった公園をしばらく眺める。



老人会四隅に幟花筵



佳与子

忠霊塔押し上げてゐる花の雲

真理子

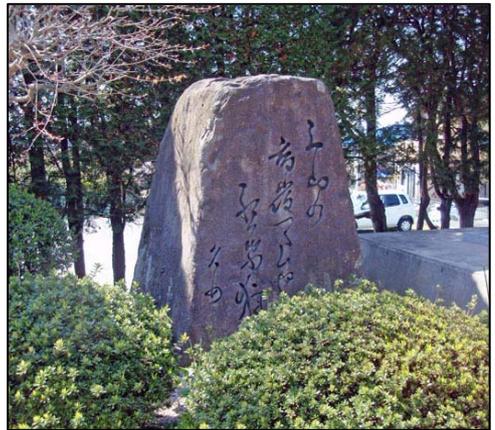
楽しみに鳩散歩する花の下

節子

ここから少し坂を上ったところに「御祖神社」(妙見神社・全国妙見総本宮)がある。神社への道の辺にも境内にも桜が咲き満ち、鶯が鳴き渡っている。この神社は、道鏡の皇位事件で足の筋を切られ大隅に流される途中の和氣清麻呂が、宇佐八幡のご神託を受けて近くの霊泉で足を癒し、近くの山(足立山)に登って天皇家の安泰を願ったことにちなみ、「足の妙見さん」と呼ばれ親しまれている。境内には絵馬と一緒に健脚を願って草鞋がたくさん吊るされている。狛犬ならぬ狛猪。これも清麻呂が猪に乗っ



【円通寺・杉田久女の句碑】



地元の人にもあまり知られていない「円通寺」は、久女の句碑があるので俳句をする者にとつては一度は行っておきたい寺である。狭い境内には誰もいなく自由に散策する。奥の幼稚園も静かだ。砂利の敷きつめられた庭には桜や背の低いチューリップの花が咲いている。

「三山の高嶺づたひや紅葉狩」（昭和五十四年）「無憂華の樹かげはいつこ佛生会」（平成元年）の句碑が建てられたのは比較的新しい。この寺の先にある広寿山福聚寺には久女がよく吟行に通い、住職は久女のよき理解者であったらしい。句碑建立を地元の文化人達に呼びかけ、その住職の息子が円通寺の住職という縁で久女の句碑がここに建てられている。ここでは毎年一月「久女忌」が執り行われている。

禅寺の桜の奥の幼稚園

節子

久女碑の枝先長き山桜

聖子

寂として山桜散る山の寺

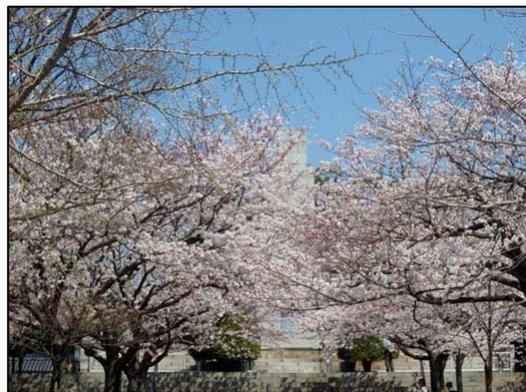
真理子

沈丁の香につつまれし久女の碑

光子

チューリップ咲く寺庭の久女の碑

由紀子



句会場はバス停近くの「サンマルク」なので、忠霊塔のある「平和公園」へと戻る。これ以上ないというほどの好天に恵まれ、午前中よりさらに桜は咲き満ちて、まさしく虚子の「咲き満ちてこぼるる花のなかりけり」の状態だ。花見客も多くなり、露店も数を増している。見回りのパトカーはゆるゆると車を走らせ、公園の近くのマンションでは引越しもあっている。花の中からみる景色はすべて春を惜しむかの如くゆっくりゆっくり動いている。



【妙見神社のしだれ桜】



タクシーにて小倉駅へ。祝賀会出席の京都行き切符を購入して解散。よき一日でした。

囀の森の上なる昼の月

光子

ぼんぼりの屋台も人も花の中

節子

花越しに煙都でありし街の空

真理子

花筵火鉢に炭も貸し出して

佳与子



【富岡鉄斎 作・妙見神社の図】

第四十三回吟行記

平成二十年五月十四日(水)

参加者 節子 光子 由紀子

南蔵院(糟屋郡篠栗町)

新緑の美しい五月の吟行をどこにしようかと問われた時、浮かんできたのが篠栗の山々。去年の五月吟行で行った飯塚の伊藤伝衛門邸の帰りの電車からみた新緑が思い出され、北九州と福岡を結ぶ「福北ゆたか線」にまた乗ってみたいとなった。

五月十四日、今にも降りだしそうな空に長傘を手に一人折尾駅から電車に乗る。途中、直方駅から光子さんと合流し城戸南蔵院前駅で降りる。同じ時刻に博多方面より節子さんも到着。駅の近くには大きな釈迦涅槃像のある南蔵院がある。ここが今月の吟行地。「篠栗四国霊場八十八ヶ所」の総本山で訪れる人も多い。

「日本三大・・・」は数知れずあるが、ここは「日本三大四国」のひとつ。四国霊場八十八ヶ所とは別に、小豆島四国、知多四国とともに篠栗四国と言うらしいが、弘法大師(空海)が修行した霊験あらたかな篠栗を訪れた尼僧慈忍が、一八三五年八十八ヶ所の創設を發願したのが始まりとされる。



何度か訪れたことのある節子さんについて行く。南蔵院まで徒歩五分。まさに駅前札所である。総本山で第一札所というだけに、広い駐車場があり、何軒かある土産屋には遍路グッズが置かれ、遍路宿の看板も掲げられている。駅の売店には土産物に混じって経本も売られている。

駅前にありし一軒遍路宿

光子

経本も売られ売店遍路駅

光子

山越えの道広くなり遍路宿

由紀子

「メロデー橋」渡り札所へ楠若葉

由紀子

歩道のない道をトラックが次々と走るので、ボヤつとしていたら危ない。足早に南蔵院に入る。山中の静かな札所と思っていたが、入口の坂道を下りてくる人や脇の札所を出入りする人など人の多さに驚く。平日の天候も決していいとは言えない日にこれだけの人が訪れるのだから、花や紅葉の美しい休日には、車や貸切バスで駐車場がいっぱいになるだろう。参道の花木は目を楽しませてくれる。石楠花はほとんど咲き終わっているが、大山蓮華の花が一つ二つと咲いている。神社仏閣の多い九州貝寄風組の吟行



だが、歴史ある建造物以外にこの花木の多さや美しさに惹かれて行くことが多い。

本堂を中心に「大師堂」や「不動明王」「三宝荒神」があるが、まず目に飛び込んでくるのが高さ十一メートルもある不動明王像。不動明王のお百度参りのコースの案内板もある。山全体に文殊堂、阿弥陀堂、薬師堂などの札所が点在し、羅漢や地藏があちらこちらとある。回りにはお賽銭の一円玉や五円玉が置かれている。



賽銭の苔にこぼれてシヤガの花

由紀子

お参りの鈴聞こえくる若葉風

光子

谷若葉鳥の名前を当てながら

節子

「七福神トンネル」を抜けると広場があり、そこには南蔵院の名前を一躍広めた世界一大きな釈迦涅槃像が横たわっている。全長四十一メートル、高さ十一メートルのブロンズ製のお釈迦さまの寝姿（自由の女神と同じ大

きさ）は他を圧倒するものがある。平成七年に完成というから新しい。体内を通り抜けることもできる。寝釈迦の足裏は「仏足跡」が書かれている。

夏山の仏頭突然目の前に

節子

触りみる仏足跡や新樹光

由紀子

初夏の日差し寝釈迦の足裏に

由紀子



新緑の山の中で眠るお釈迦さまのやすらかなお顔は、お参りに来るものに安らぎを与えるものだろうが、大きすぎて何やらユーモラスでもある。多くの供養塔から信者の多さが伺われるのだが、トンネルの両側には「仲良し地藏銅板」が張られていたり、「仲見世通り」と書かれた通りには休憩所やお土産屋が軒を連ねていたり、講話が上手と評判のご住職の説法がビデオでながされていたり、至る所に訪れる者を飽きさせない工夫がされている。俗に言えば商売上手。



「仲見世通り」の大柱には「住職と行く東北三大寺めぐり」の募集パンフレットが張られている。

はじめての霊場めぐりは、お堂や滝や花木を見ているうちに過ぎていき、年寄りばかりでなく若者や若い親子連れに人気があることに納得いく。

昼食は南蔵院内の食事処「たまや」で精進弁当をいただく。コンクリート打ちっぱなしのモダンな造りで、札所にいることを忘れてしまう雰囲気のお店。句会は少しはずれの茶店にて十句。

帰り道、札所の関係者だろうが、置かれているお賽銭の箱や笹からバケツの中にそのお賽銭を無造作に投げ入れている。人間のすることは俗っばいが、池に投げ込まれたお賽銭の上を虹鱒が悠然とおよんでいる。

少しだけ雨はぱらついたが、昼からは初夏の日差しがやわらかく差し込

み、暑くなく寒くなく清々しい風の中を歩くことが出来た吟行。帰りも「メロディー橋」の欄干に取り付けられている鉄琴を備えられたバチでたたき「ふるさと」のメロディーを口ずさみながら駅へと向かう。それぞれ途中下車して帰路につく。

今月は都合で佳与子さん、聖子さん、真理子さんが欠席となったが、六月の夏行、定例句会でまたお会いしましょう。



【涅槃像の仏足跡】





【お百度参りの図】



【螺髪 (らはつ) : 頭のいぼいぼ】



【境内の竹林】



【大師堂】



【メロディー橋】



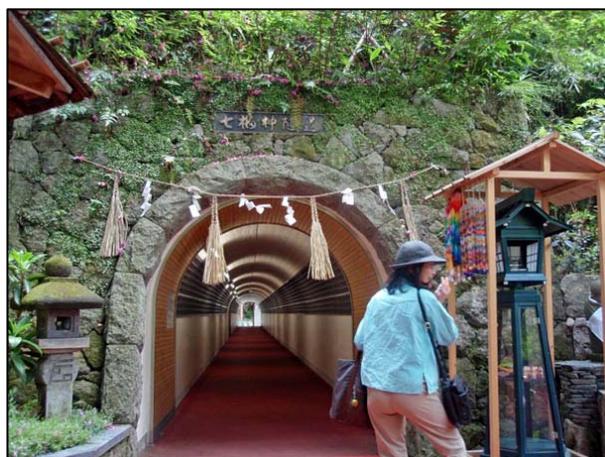
【水御籤】



【寄進された灯籠】



【涅槃蔵】



【七福神トンネル】

第四十四回吟行記

平成二十年六月十二日(木)

参加者 佳代子 節子 光子 由紀子

太宰府天満宮・光明禅寺(太宰府市)

六月六〜八日の琵琶湖夏行を終え、その余韻の残る十二日太宰府天満宮を吟行する。今年は九州北部の梅雨入りは関東より遅く十日に梅雨入り。十一日も一日中雨が降ったが、十二日当日空を見上げれば曇。予報では次第に回復してくるといので、折畳傘をバッグに入れ現地に向かう。

十二時西鉄太宰府駅集合。駅前からすぐ続く参道はそこそこの人出で、名物の梅ヶ枝餅の店は忙しそうに餅を焼き上げている。何気なく上を見ると燕が巣を作っている。参道の両側は土産店が並んでいるのだが、よく見ると軒ごとに燕の巣がある。燕の子らし口嘴が見える。いつものように神



牛を触り道真公の歌碑を見上げ、鳥居の前に立つ。日本最古という

石鳥居には朝顔の蔓が這い登ろうとしている。心字池の太鼓橋を渡らずにすぐ菖蒲池へと向かう。

紫陽花と大楠の枝が覆っている径を抜けると、明るい花菖蒲の池が広がっている。ここの菖蒲池はコンクリートの円形の筒にそれぞれ株を植え込んでいる。まだ盛りとは言えないが、大振りの紫や白の菖蒲が咲いている。花の名所では必ず見かける高齢者のカメラマン達が、ここにも三脚を構えて写している。

「紫は水に映らず花菖蒲 年尾」の句碑が池に張り出しているデッキの近くに建っている。その句碑の回りや花菖蒲の間を鯉がゆっくり泳ぎ、亀は首をだしたり甲羅を干したり、水澄ましもいる。昨日の雨に濁っている池のどこから牛蛙が鳴いている。



顕彰碑句碑も数あり菖蒲池

聖子

結ばれしみくじ紫菖蒲池

節子

菖蒲池の向こうは「曲水の庭」。ここは通常人が入らぬように柵をして



いるが、この庭や回りに植えられている梅の木には、それぞれに「献梅」の札が下げられている。

「献梅」の札に「・・会」や個人名が書かれたものがある。今年の二月か三月だったか、天満宮に献梅予定のある男性を取材したテレビ番組を見た。それは「梅上げ」と呼ばれる太宰府小学校の同窓生を中心にした還暦行事を紹介するもので、男性はその参加者。大勢の還暦を迎えた同級生たちが集まり、献

木する梅の木探しから始まり、当日は皆赤い法被を羽織って献梅の木を牛車に乗せて町を練り歩き、三味線や鳴り物付きで沿道の人に小餅を配る。参道の各店もお茶や酒などだして接待をする。そして境内に植えられた梅の前で記念撮影。いつ頃から始まったのかわからないが、テレビに映る男性の嬉しく誇らしい顔が印象的だった。

どの梅の木にも思いがこもっているだろうが、実の摘まれているもの、落花しているもの、たわわに生っているものがあり、青梅の行方が気になっている。「飛梅」の実は毎年巫女さんたちが拾い、その姿がニュースで放映されている。境内の梅は梅酒や梅干として販売されているというので、早咲き遅咲きの種類によって摘まれる時期が異なるのかもしれないなどと思

いながら、菖蒲池、曲水の庭を後にする。

献木の青梅あまた落花して 佳与子

たわわなる実や献梅の札下げて 由紀子

一木の実梅摘まれぬままに在り 聖子

本殿にお参りした後、裏の梅林を通り抜け「お石茶屋」へと向かう。残念ながら定休日。手前の茶店にて昼食。何十人も団体客が入り店内は満席状態だが、総ガラス張りの窓いっぱい梅の青葉が広がり窮屈感がない。安くて美味しい食事に満足。外に出て、梅の青葉の下に置かれている床几に座る。梅の青葉の上に大楠の青葉が重なっている。

梅青葉お石の茶屋は定休日 由紀子

太宰府の千年楠の緑蔭に 由紀子

中国語、韓国語が飛び交っている天満宮を後にして光明禅寺へ向かう。大鳥居から脇道に入るとすぐに山門が見える。前庭の石庭、楓と苔生す緑の後庭は何度見ても美しい。しばらく座っている。次々に拝観者が入ってくるが、ざっと見て出て行く人もいる。多くの中国韓国観光者には禅寺の庭はどのように映るのだろうか。





門前の大濠若葉影

佳与子

薰風や庭に光の石の文字

佳与子

裏山より風降りてくる花楓

節子

山の端の隅々までも梅雨の晴れ

聖子

参道にある梅ヶ枝餅の店「かさの家」の茶房にて句会。参道に店を構えている店の梅ヶ枝餅はどれも美味しいが、ここはいつも行列ができています。京都風の土産店の奥に掘りごたつ風のテーブル席。静かな店内のガラス越しに庭の青葉が見える。美味しくって餅のお替り。それぞれにお土産用の梅ヶ枝餅を手に太宰府駅にて解散。光子さん、真理子さん欠席。



【「年尾」句碑】



【献梅と歌碑】



【光明禅寺石庭】



【心字池】



【光明禅寺山門】



【光明禅寺「一滴海庭」】



【ハクサンボクの実】

第四十五回 吟行記

平成二十年七月三日(木)

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

到津の森公園(北九州市小倉北区)

久しぶりに「到津の森」を訪れる。娘の幼稚園の遠足の付き添いで来て以来だから約二十年ぶりかと思う。その時と比べて動物は少ないが、動物園独特の強い臭いはなく、森の中に点在する檻は、ゆっくり見て回るにはちょうどよい。



北九州市の中心街に程近い「到津の遊園地」は、長年子供達が動物と触れ合う場として親しまれてきたが、十年前の平成十年に経営する西鉄が閉園を発表。その後存続を求めている運動があり、市が基金やボランティアの募集などを行い、平成十四年新たに北九州都市整備公社管理運営の「到津の森公園」として開園している。商業施設としての動物園、遊園地の賑わいはないが、緑豊かな市民の憩いの動物公園として、また子供達の学習の場として大きな役割を果たしている。

七月三日、佳与子さんの住んで

いる高見に集合し、車で総合体育館近くの「到津の森公園」の駐車場へと向かう。大通りに面した南ゲートは団体専用バス駐車場のみで、裏口にあたる北ゲート脇の普通車駐車場に止める。園内に入るとすぐに工事中のシートが張られ、「せせらぎ広場」と書かれた案内板の奥で作業の男達が働いている。小雨がパラパラと降ってきては止み、時折薄日が差す。森の明るさに梅雨明けの近さを感じる。奥から園児らや親子連れの声が聞こえて来る。最初に目に入ってきたのが猿山。ニホンザルの親子たちが岩山に遊んでいる。水たまりのある岩陰には老猿が動かず、元気のよい若い猿は常に動き廻っている。反対側はロバに乗ったり、山羊に餌を与えたりできる「ふれあいコーナー」。子供達に人気の場所だ。

夏休み前の動物園として

節子

木苺や猿の遊びもすぐ飽きて

光子

老猿の泉の陰に動かざる

真理子

大南風山羊の白鬚からませて

由紀子



レッサーパンダやプレリドツグの檻の先に「里の生き物館」や「郷土の森林」への案内板がある。園内を隈なく見て回るには時間がかかりすぎるので矢印の方へは行かず、道沿いのバードケージに駕



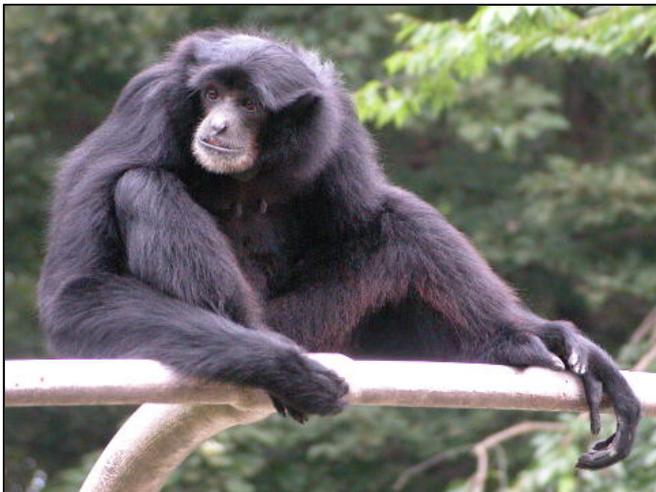
突然近くの森から異様な雄叫びが聞こえてくる。姿が見えないだけに興味がわくが、ちよつと休憩。正面の南ゲートの管理センター内に入ってみる。夏休み向けの「カプトムシ、クワガタ展」の看板が置かれている。管理センターの二階から展望デッキへ行く。ウッドデッキには吊り下げられた鳥かごにオウムやインコがいる。「キバタン」という真っ白なオウムは、驚いたり興奮すると鮮やかな黄色の冠羽を



鳶がいるというので入ってみる。長い嘴のトキやシギ、鴨がいるが、お目当ての鴛鴦が見つからない。係り員に尋ねると、夏の間は夏毛といって地味な色をしているという。灰色に近い色なので鴨の種類と思っていた鳥が鴛鴦とわかる。モノローウオークしているアヒルの傍には卵が転がっている。アヒルは卵を温めないらしく、係り員が卵を拾い、ケージ内の鳥たちに餌を与え始める。

日盛りにあひるのたまご転がりて 光子

梅雨晴に拾ふ家鴨の卵二個 真理子



雄叫びの主がいる。「フクロテナガザル」。愛嬌のある顔の下にある喉袋を利用して大きな叫び声を出す。一度鳴き出したら長い。檻ごとの鳥や猿を見ながら園内唯一のレストランに入る。メニューには子供の好きそうなものばかり。スパゲティ、オムライス、カレーなどテイクアウトにもできる容器に入っている。

立てる。もちろん冠羽を見せてもらおう。あちらにちよつかい、こちらにちよつかいしていると、またしても雄叫びが間近に聞こえる。

緑陰のあればオウムの籠吊られ 佳与子

呼びかけにオウム忘れて園涼し 佳与子

とけい草巻きつく空の鳥舎かな 真理子

少しだけ遠道になる片陰を 節子



梅雨晴れ間猿の雄叫び長々と

由紀子

日の盛り猿吼えさせてみたりけり

光子

遠吠えの猿喉ふくれ青嵐

佳与子

猿突として鳴きはじむ青葉風

真理子

つたような間が気になったが、「いいねー」の返事。吟行を楽しむことのできる環境に感謝しつつ地上に降りる。

観覧車無人の箱を梅雨空へ

佳与子

梅雨空へ音なく上る観覧車

真理子

夏雲へ向かって上る観覧車

節子

涼風の少し揺らして観覧車

光子

水浴びをしている象。檻の奥から鋭い眼で見ているライオンや虎。高枝の葉っぱを食べているキリン。それらを見ながら管理センター前の池辺まで戻る。森の動物園は広すぎず狭すぎず、時折の雄叫びを除いては静かで、木洩れ日の池辺に休む。緑陰の涼しそうなベンチに座り十句の句会。

夏草を踏む虎に園空狭く

光子

池の面たたたくトンボの奥に虎

真理子

合歓の花きりんの首の高々と

節子

緑陰にをりしライオン横を向き

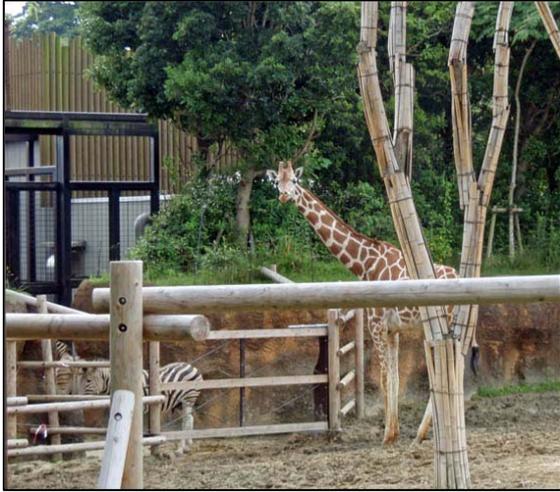
由紀子

水浴びに涼しく象の耳しっぽ

由紀子

レストランの先は、子供汽車やメリーゴーランドのあるこじんまりとした遊園地。大広場の向こうに

観覧車がゆつくり回っている。キリンやフラミンゴを見ながら誰も乗っていない観覧車の所までくると、一人が観覧車に乗るといふ。私も私もといふことになり、結局全員乗ることになる。一つの箱に一人。ちよつと寂しくもあり、ゆつくりと遠くの家や市街地、また園内を上から眺めることのできる時間。気持ちがいいな一と思っていた時にかかってくるきた娘の電話に「母さん今観覧車の頂上」。一瞬引いてしま



今年の九州北部の梅雨明けは早く、旬会すぐ後の七月六日。その後ほとんど雨が降らず猛暑日が続いている。この暑さの中、あの動物達は元気になっているだろうかと気になるこの頃である。都合で聖子さん欠席。



【バードゲージの中】

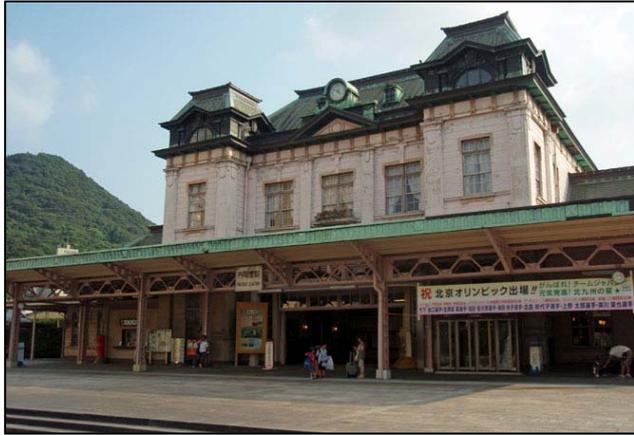
第四十六回吟行記

平成二十年八月六日(水)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

門司港と山宿(北九州市門司区)

年々夏の暑さは厳しくなっている。今年も七月上旬の梅雨明けから一ヶ月ほとんど雨が降らず、日中は三十五度前後、夜は熱帯夜が続く。普段元気にしている人も、この暑さの中を歩くには参ってしまふ。退院したばかりの熟女参加の吟行ということもあって、暑さに立ち向かうより体を労わりつつ疲れを溜めないのが何よりと思ひ、のんびりと過ごせる場所を探す。以前門司港の近くに吟行句会に良さそうだという宿があると聞いていたので、さっそくネットで探し電話を試みる。お昼のみでもよし、送迎



バスもありということ決定。

八月六日門司港駅改札口に十一時三十分集合。集合時間と食事処のみ決めての吟行句会。皆何度か訪れている場所なので、あとはその場で何とかなるだろうとお気楽気分。門司港駅に降り立つ。佳与子さんと二人レトロ街へと歩いて行く。跳ね橋やオルゴール店、ガラス細工の店など見ていると、あつという間に集合時間が迫り、急ぎ足で改札口まで戻ると全員揃っている。

桔梗活けてレトロな駅の待合所

真理子

夏草のからまるレンガ倉庫群

光子

跳ね橋へ行くも戻るも片陰を

真理子

駅前路線バスや観光バスの発着所に、今日の食事処「伯翠庵」のバスが待っている。他の客はいないようである。乗り込むとすぐに出発。繁華街を抜けると坂道になっている。山がすぐ迫っている地形は港町らしい。「伯翠庵」の大きな看板が見える。山道となり離合できないような細い径を抜けると、木々に埋もれたような宿に到着。ここからは港も海も見えない。山門を潜ると大小の建物が山側に点在している。打水された石畳に夏草が伸びている。通されたのは六棟ある建物の一つの茶室。ガラス窓には覆いかぶさるように竹や広葉樹の枝が広がっている。その先に町並みが見え、冷房で冷えた部屋には涼しげなお軸が掛かり、窓を少し開けると水音が聞こえる。



木洩れ日の射すこともなき岩清水 節子

水音の絶えぬ庵の夏料理 由紀子

湧水の流れ涼しき音となり 聖子

清流に遊ぶ蟹をり爪赤し 聖子



作務衣を着た年配の男性が料理を運んでくる。静かな語り口は避暑客に心地よい。他にも客が居そうだが、離れ家の造りは誰からも邪魔されな

い。この宿の繁忙期を尋ねると、ふぐ料理を出す冬場だと言う。蟬の鳴き声が絶え間なく聞こえてくる。食事の後は、誰となく寝ころんで昼寝をしたり句作をしたりで時間まで過ごす。

割り込みし声のいつしか蟬時雨 節子

チェーンソーの音時折に蟬時雨 節子

窓少し開け蟬時雨山の宿 由紀子

並びある靴にとまりぬ夏の蝶 佳与子

卓寄せて女四人の昼寝かな 佳与子

みんなの声の調子のととのいて 光子

デザート西瓜小さなグラス入り 光子

打水の乾きし路地を戻りけり 佳与子

作務衣の男性と若く美しい女将が出てこられて、送迎バスに乗り込んだ私達を見送ってくれる。来る時には気付かなかったが、山門までの径は桜の樹が何本も植えられている。隠れ家のような宿を後にして門司港駅まで戻る。まだまだ真夏の日差しが厳しく、あまり歩きたくないので、近くの「門司港ホテル」のレストランで句作、句会を行なう。日の傾いた海峡は白々として、入道雲も立ち上がっている。行き交う船を見ながら珈琲一杯で粘る女六人の客にボーイさん達は嫌な顔を見せない。十句出句。
駅前広場には人力車を引く若い男達が客待ちをしている。真っ黒に日焼けした車夫をよく見れば、すらりとしたイケメン揃い。電車から降りて



来る観光客に声をかけている。広場の中央には飛び出す噴水があり、小さな子供達がびしょぬれになりながら遊んでいる。その様子をビデオに収めている若い母親たち。午後四時すぎの門司港には、まだ強い夏の日差しがキラキラと残っている。

入道雲同じ角度に傾いて

節子

ホテルより見える海峡夏の潮

真理子

タンカーの向かふ海峡大西日

由紀子



【レトロ調の待合室】

門司港駅舎と海峡はいつ来ても絵になる風景で、北九州一の観光地として定着している。ここから和布刈神社のある広場までトロコ電車を走らせる計画があるらしい。今から楽しみにしている。

乗る客に団扇渡して人力車

光子

噴水のそばに客待つ車夫瘦せて

真理子

噴水が好き濡れるのが好きな子等

由紀子





【門司港レトロの跳ね橋】



【門司港駅傍の渡し場】



【食事処「伯翠庵」と山門】

第四十七回吟行記

平成二十年九月十一日(木)

大濠公園周辺(福岡市中央区)

参加者 節子 聖子 真理子 光子 由紀子

まだまだ日中は三十度あるが、朝夕涼しくなりようやく秋らしい風が吹きはじめ。九月十一日十時四十分大濠公園に集合。
予定時間より少し早く着いたが集合場所に誰もいない。時間を間違えた



か少し不安になったところに、それぞれが違う方向からやってくる。広い大濠公園は市の中心部にあって、夕方や休日にはウォーキングする人、ジョギングする人、犬の散歩する人など多くの人の憩いの場所であるが、平日のこの時間帯は人が少なく、早足で公園を抜けて行く人がチラホラ。集合場所のレストランの前は工事なので、すぐに池に沿って歩き出す。公園の大部分を占める池には白鳥の形をした足こぎボートや手こぎボートが繋がれたままになっている。日差しがだんだん厳しくなり、木陰を求めて舞鶴公園へと向かう。

対岸はいまだ残暑の中にあり

節子

六艘のボート繋がれ流れをり

節子

春には美しい桜が咲く広場を抜けて、道を隔てた舞鶴公園に着く。ここは福岡城址を中心にした公園で楠の大樹や躑躅や桜などの花木に覆われている。石垣を見上げながら菖蒲池や睡蓮(未草)の池に辿り着く。濃いピンクや淡い黄色の花をつけた睡蓮がまだ咲いている。池には一羽の青鷺が舞い降り、岸边には黒々とした牛蛙が鳴く。しばらく休んだ後、石段を登り城址に沿った径を辿る。大木の枝が括がり木陰となっている。

城跡の径はここまでひつじ草

由紀子

秋日傘骨の歪みはそのままに

聖子

城址の坂を途中から下りて国体道路沿いにある食事処に向かう。



昼食予定の「ベネティア食堂」はきつかり十二時開店の店らしく、少し店の前で待ちながら、この辺りからはじまるブティックなど小奇麗な店が建ち並ぶ「けやき通り」の街並みや、今下りてきた城址の木々やその上を流れる秋の雲を眺める。築五十年の古民家を利用した「ベネティア食堂」は通りを覆うように枝を広げた樺に埋もれてしまいそうな小さな外観だが、店内は二階もあり、若い女性たちが次々に上っていく。美味しい料理を済ませ満足したところで、城址の隣に建つ史跡「鴻臚館跡」へ。

以前平和台球場があった所に建つ「鴻臚館跡」は、入館無料で入口案内所の男性がパンフレットを渡してくれる。体育館のような建物の中には、発掘された礎石やかわらけが白線で囲まれ、往時の建物の一部が再現されている。また飛鳥・奈良時代から外交使節をもてなす迎賓館だったと裏付ける出土品が展示されている。一九八七年（昭和六十二年）末、平和台球場の外野スタンドの改修にともなう発掘調査は当時大きなニュースになっていた。

野球場在りしあたりや秋の風

真理子

鴻臚館在りし昔や葛の花

真理子

鴻臚館跡の礎石や葛の原

光子

白線で囲むかわらけ秋の土

由紀子

館内にはビデオなどあって館の歴史など流されていたが蒸し暑く、ざっと展示品など見て外へでる。昔の迎賓館の跡としては殺風景な建物だが、ここに遺跡の存在が確認されたことが大切なのだろう。

さてこれからどうしよう
 と思っていた時に聖子さんの
 の上着がないことに気づく。
 記憶を辿れば睡蓮の池あたり
 りで休んだところしかない。
 葛の花や城垣の仙人草など
 見ながら来た道を戻る。





やっぱりあった。睡蓮の池から石段を上ったが、その石段の手摺に掛けていた。拾って掛けてくれた人の気持ちに何だかホッとする。心寂しいニュースが多い中、ちよつとした心遣いがうれしい。

舞鶴公園から美術館の裏口にあたる一階ロビーに着き一休み。一列に並べられている椅子に座ると、吟行はよく歩くものだと実感する。句会は二階の正面玄関の横にある広い喫茶室。邪魔にならないように一番奥の窓際の席に陣取り、ガラス越しに大濠公園の少しだけ色づいた木々をみながら十句の句会。

城跡の仙人草に白き垣

真理子

ここまでは香り届かぬ葛の花

節子

落し物探しに戻る蟬時雨

真理子

秋暑し忘れ置かれし上着あり

聖子

蓮の実のあらかた失せてしまひけり

光子



閉館近くなつた美術館は人影もまばらになつたが、大濠公園はこれから犬と散歩する人やジョギングする人などが行き交う。天神駅へと向かう途中、以前枯れ蓮刈りをしていた堀をみると、まだ蓮の花がほんのわずかに咲き残っている。ほとんどが実となり、その実も飛んでいるものが多い。この辺りは都心の憩いの場というだけあって、四季折々に楽しめる。また桜や躑躅の季節もいいかないと思ひながら帰りの電車に乗る。

万歩計付きの携帯に表示された歩数は約一万六千になつていた。



【舞鶴公園】



【仙人草】



【葛の花】



【牛蛙】



【蓮の実】

第四十八回吟行記

平成二十年十月十六日(木)

紫川・小倉城周辺(北九州市小倉北区)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

十月十六日、十一時現地集合。集合場所の紫川にかかる「鷗外橋」の近くには、小倉城や市庁舎がそびえている。爽やかな風が吹き、空には少し雲がかかり、絶好の吟行日となる。今月は佳与子さんの足の状態がよくないので、じっと座っていてもそれなりの吟行ができる所ということで、小倉城近くの護岸整備がされて綺麗になった紫川周辺を散策することにする。元氣そうな笑顔が揃う。



まずはお腹を満たして元気がでたところで吟行というのが、あしや句会

恒例となっているので、川沿いの

「クラウンパレス小倉」にて昼食。

少し時間が早いかなと思っただが、

次々に入ってくる客をみている

と、景色のよい六人掛けのテーブル

を確保するにはちょうど良い

時間だったようだ。

小倉の繁華街と小倉城を隔て

るように流れる紫川は、名前のイ

メージとは程遠いドブ川だった

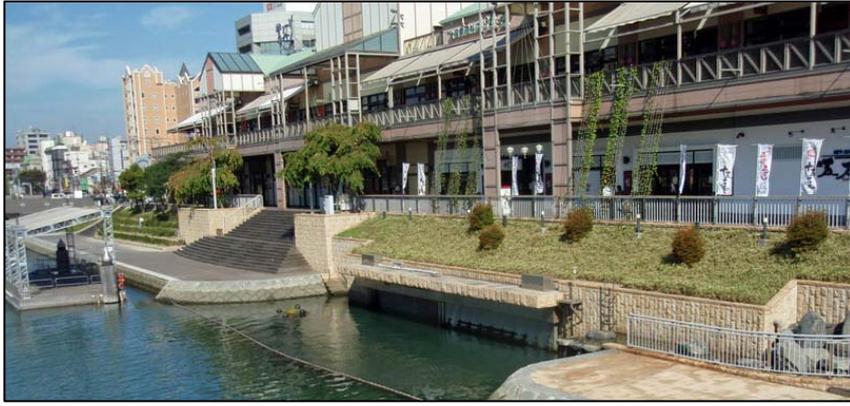
が、北九州が掲げた都市再生事業

として織り込まれた「紫川マイタ

ウン・マイリバー整備事業」によ



って市民の憩いの場所として生まれ変わっている。最初に取りかかったのは橋の架け替えだが、「石の橋」「火の橋」「木の橋」「鷗外橋」「風の橋」などそれぞれ特徴ある橋は、噴水や遊覧船や水上ステージとともに公園の一部として楽しむことができる。当初は橋ばかりに税金を使つてと批判する人も多かったが、かつての紫川沿いの建物が店舗の裏側ばかり見える殺伐とした風景から、川沿いのオープンカフェから街並みを眺める空間ができ、多くの市民が集まるようになったのは、結果的に市の取り組みは成功したのではないだろうか。



待つ人の電車着く頃秋晴れて

佳与子

底深く河口流れ出る秋の潮

聖子

川風になびく幟も鯊日和

佳与子

橋の上より鯊釣を見る人も

佳与子

紫川を直接覗ける観察窓のある「水環境館」を見学する。民間の商業施設「紫江,S」の地下にあつて、知る人ぞ知る施設だが、多くの小学生達の学習体験場所となっている。観察窓には実際に泳いでいる鯊や黒鯛などが現れる。館の完成直後に見たときには川底まで透けて見えていたが、天候などの条件もあるだろうが、水は濁り時折姿を現す魚しか見えなかったのが残念。

淡水と海水の境界面ができる現象「塩水くさび」の説明や紫川に実際棲んでいる魚が水槽に飼われているので、時間がある時にはゆっくり眺めることを勧められる。毎年「北九州市長杯ハゼ釣り大会」が行なわれているほどに水質が良くなったのは喜ばしい。



ごんずいのひげを数えて水の秋

佳与子

カニの目の長く伸びたり秋の晴

光子

気がつけば雲みな消えて秋の空

節子

「水環境館」から「鴈外橋」を渡って小倉城方面へと向かう。「小倉城庭園」の裏側を覗いてみる。中に入れそうだ。武家屋敷を再現したもので、池や築山のある回遊式庭園には鯉が泳ぎ、石露の花がいくつか咲いている。「ここからは有料」の札があるが、池の近くまで下りていくことができ、庭園の秋の風情を十分感じることができ。ただ秋蚊が音もなくやってきて痒い。

花石露の咲くばかりなる庭に出て

光子

秋日濃し庁舎に高く日章旗

由紀子

隊列の練習続く薄紅葉

真理子



庭園の周囲を歩いて句会予定の市庁舎へ。十五階のレストランは展望台のように小倉の街が一望できる。以前句会をした時には広すぎると思ったが、今回行ってみると、三分の一程度の狭いスペースになっている。市長が変わり無駄を省こうということだろう。それでも、利用する人が少ない時間なので句会場には手頃な場所だ。

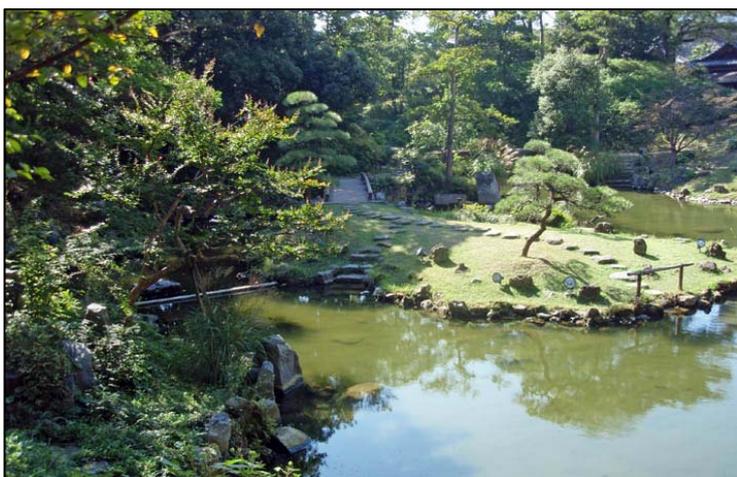
目の前にはリバーウオークの斬新な建物、遠くには関門橋が見える。秋の澄んだ空に工場の煙突から白い煙が立ちのぼっている。十句の句会。佳与子さんの早い回復を願いつつ、それぞれ帰路につく。



【小倉城庭園内の書院棟】



【小倉城と商業施設のコントラストが特徴的】



【小倉城庭園】

【小倉城に隣接するリバーウォーク】



第四十九回吟行記

平成二十年十一月七日(金)

参加者 節子 真理子 由紀子

竈門神社・四王寺山 (太宰府市)

今月は参加者三人の吟行句会なので、のんびりと筑紫の「宝満山」の麓を散策する予定。雨の予報にそれなりの準備を前夜にして、早朝に出張の夫を送り出した後、快速電車に乗って集合場所の大野城駅へ向かうはずだった。だが、たったひとつの忘れ物によって予定も気持ちも大きく変わることがある。この日がそうだった。いつもより早めの時刻にセットした目覚まし時計のスイッチをオンにするのを忘れていた。目ざめた時の時計の針に一瞬頭が真っ白。怒る余裕もなく出かけていった夫に申し訳なく思いつつ、自分も出かける用意をする。予定していた電車に乗れず遅れて着く。駅で待っていた節子さん、真理子さんの笑顔に救われたが、肩に重いものを掛けていたようだ。前日の夕方から降りだした雨は止んだものの、まだ空は厚い雲で覆われている。句帳に「ずしりと重く時雨かな」「晴れぬ空 晴れぬ心や」などの言葉が並ぶ。

明らかに我にある非の冬の雲

由紀子

節子さんの車で太宰府の町を抜け、天満宮の裏手になる宝満山の麓の「竈門神社」に着く。苔生した石段の先の鳥居を潜り、桜の冬木の中に混じる真っ白な山茶花を見ながら本殿へと向かう。大樹に囲まれひっそりとしているが、境内は手入れが行き届いている。この辺りは宝満山の登山口になっているらしい。標高八二九・六メートルの山頂には、大宰府の鬼門

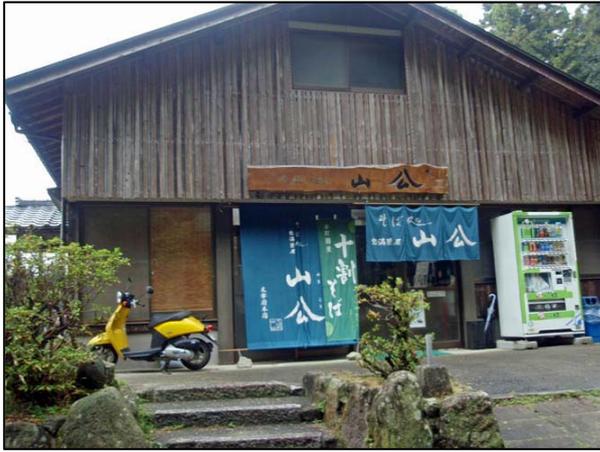


を封じたとされる竈門神社の上宮があり、また諸々の伝説や修験道の霊峰として歴史に彩られた山は、玄界灘や筑紫平野を見下ろし、英彦山から連なる山々を望むなど三六〇度の展望の良さも重なって一年中登山者が絶えない。竈門神社の下宮は、その正面登山口の入口として親しまれている。昨夜の雨に濡れた木々が一段と神聖な雰囲気醸し出す。

この雨をさざんか梅雨とかや云う 節子

引っ掛かるものに山茶花か、り散り 節子

本殿下に鹿小屋がある。参拝後に社務所にて鹿の餌を買い求めると、禰宜がさつまいもを小さく切って皿に盛ってくれる。餌を持って小屋の前に立つと小鹿が寄って来る。急坂の広い小屋に何頭いるかわからないが、親らしい男鹿はじつと動かず上から餌を食べている子鹿を見守っている。



餌を待つ鹿おとなしく口寄せて
真理子

鹿の尾のくるりと回る冬の蝶
真理子

餌のすみし鹿それぞれに戻る場所
真理子

手より餌をとりし小鹿の離れゆき
由紀子

困われて男鹿一頭柵の中
節子

神社から登山道らしき道に出る。少し奥まった所に滝が見える。石も倒木も苔生している滝川には霧が流れはじめ、それ以上奥に入り込むことを拒んでいるようだ。道沿いの一軒のみある蕎麦屋に入る。客は他に二組ほど。粘りの強い自然薯を絡めて食べる蕎麦に一息つく。サービスの十割蕎麦ならではの団子も美味しい。

かりそめの行者姿の時雨れ行き
真理子

新蕎麦とありし看板登山口
真理子

蕎麦屋の横の「山の図書館」をのぞいてみる。山に関する本が所狭しと並び、壁には山の写真や登山の道具が掛けられている。

男性二人が静かに本を読んでいる。ここは山愛好家の人によって自主運営されている全国でも数少ない山岳図書館。山登りの情報や交流の拠点として活動しているらしい。絵葉書一枚買って外に出る。

神社近くにある集落のような民家の中を歩く。黄色や赤い花が咲いているが名前が分からない。人とすれ違うことはなく、少し寂しげな路地を通り抜け龍門神社をあとにする。





栗の毬隅に積み寄せ山の家

由紀子

どこまでも猫ついてくる夕時雨

節子

一匹の子猫つきくる神の留守

真理子

水城へとつづく山城谷紅葉

真理子

山から下りてまた山へ。今度は「四王寺山」。別名「大野山」と呼ばれるこの山は以前にも吟行したが、ここからは太宰府の町がよく見える。宝満山の自然歩道と連なる四王寺山の自然歩道も所々の紅葉が美しい。麓の温泉宿で十句の句会。二人は湯に浸かる準備をしていたが、それも忘れて駅へと急ぐ。

俳句作りの良さは色々あるが、思いを句にしてしまえば、嬉しいことは更に嬉しく、悲しいことは軽くなる。朝のずしりと重い気持ちは消えずとも軽くなり、神社の白い山茶花や山々の紅葉に気持ち動く。有難い。またの機会にこの温泉宿の湯に浸かろう。



追記：京都吟行の出発日も夫の出張と重なるが、二つの時計をセットオン、携帯電話の目覚ましも鳴らして同じことを繰り返すことなく送り出し、無事予定の京都市きの新幹線に乗り込む。この日在京線の遅れあり。早めに自宅を出たのが幸いし新幹線に乗れたが、何事も早めの準備が必要かと思ふ一日となった。



【竈門神社前の山茶花】



【宝満山 登山口】



【皇帝ダリア】



【桜の花】

第五十回吟行記

平成二十年十二月十九日(金)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

百道浜・シーホーク周辺(福岡市中央区)



飾られたクリスマスツリーが年末のホテルらしく、気分を高揚させてくれる。十一時集合。すぐに三十五階の食事処「ともづな」に行く。博多湾に向く店内からは志賀島や能古島が遠くに見え、眼下には都市高を走る車が

十二月月上旬の昇先生を囲んでの京都大原吟行句会の楽しかった余韻も収まった十九日、「あしや句会」全員の参加で今年の納め句座をすることになった。福岡の市街に詳しい聖子さんのお世話で、ヤフードームの横に聳える「シーホークホテル」周辺を吟行する予定。博多駅からバスで二十分程の百道浜のこのホテル周辺には、ドームを中心にしたホークスタウンや中国、韓国の領事館などもあり、少し離れた所には福岡タワーも聳えている。福岡の観光スポットのひとつになっている。

集合場所のホテルロビーの華やかな生花や横のアトリウムに

小さくみえる。食事予約の時間には少し間があるので、お店の配慮で海に見えるテーブル席に案内される。

バス揺れて毛糸帽の子又眠り

聖子

流れ藻のごとく人見え冬の浜

真理子

冬晴の玄海へ出る船らしく

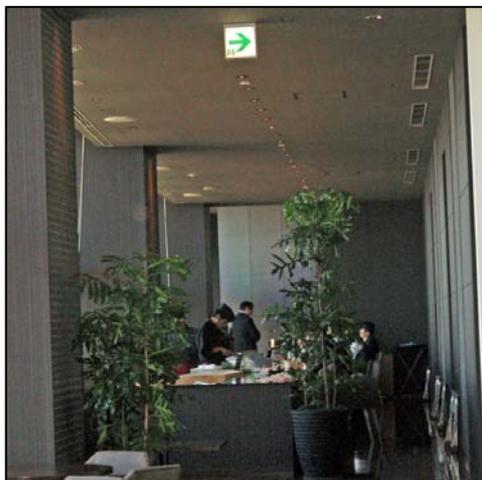
真理子

昼食はカウンターに座り、一本の小ビールを六個のビールに注ぎ分けてささやかな乾杯。空とも海ともつかない窓の外の青い景色を眺めながら、目の前で握ってくれる鮎をいただく。

シーホークの最上階を満喫し、ホテルのプライベートビーチのような美しい海岸に下りて行く。

このあたりは二〇〇一年に放映された大河ドラマ「北条時宗」

の撮影用の通りがセットされた所。蒙古襲来の舞台として、中世の商都・博多を再現していた。対岸の志賀島の金印、福岡城址横の鴻臚館など、博多は大陸に向けて展げてきた古い歴史がある。この辺りから出て行った遣唐舟。唐人たちの万葉歌も多く残されている。



金印の島くつきりと冬の風 由紀子

影の砂に小さく着膨れて 節子

人工の浜に冬の日やわらかく 真理子

この日の博多湾は穏やかで、まっ平らな水面を定期船らしき船がゆつくり動いている。防波堤に寄せる波音のみが大きく響き、波しぶきに太陽の光りが降り注ぐ。しぶく度に小さな虹をつくり、皆の歓声があがる。防波堤の内側には浮寝鳥のように白いブイが所々に浮かんでいる。砂浜には白い貝殻が残されているが、湾になつていいるからか、掃除をしているのか、漂流物らしいものはなく、松林が細く続いている。

波しぶくたびに生る、冬の虹 光子

岸壁の隙間にドンと冬の濤 光子

波音に風邪の小声のかき消され 佳与子

堤防に虹冬の波しぶくとき 由紀子

灯台を冬の波より守る鎖 由紀子

冬風の湾出てゆきし定期船 真理子

この辺りは再開発事業によって埋め立てられ、福岡市の中で一番変貌した場所だと思うが、西側の樋井川の橋を渡れば、福岡タワーや海に突き出た商業施設「マリゾン」に行くことができる。高層ビルと新しい住宅街が広がる。東の方に目を向ければ玄海灘の上空から飛行機が姿を現し、山や街をかすめて消えていく。そういえば福岡空港がある辺りだ。

着陸の飛行機冬のビルかすめ 真理子

眠る山かすめて機影着陸す 由紀子

枯芝に福岡タワー影のびて 節子

冬の日の落つ能古島志賀島 節子

遠巻きに鳶追ふ如き冬鴉 聖子



日が傾き始めると、暖かいとはいえ冬の浜。コートの衿を立てて歩く。犬と散歩する人や、自転車を通りかかり浜に下りてくる人もいる。福岡タワー方面はまたの機会に吟行するとして、ホテルに戻りロビー横のアトリウムに入る。全面ガラス張りのアトリウムの天井部分には帆がかけられ、南国の木々の間にテーブルが置かれている。暖かい紅茶や珈琲を注



文して十句の句会。

あちらこちらと歩く吟行ではなく、のんびりと冬の博多湾を楽しむ吟行句会になった。忙しくなる歳の瀬を控える主婦にとって有難い。

一歩ホテルを出るとビルに落ちていく日が赤く西の空を染めている。隣のドームで開催されていた就職説明会に参加していたらしいスーツ姿の若者達が帰っている。急激に厳しくなった経済環境に、二〇〇九年はどういう年になるのだろうかと思いつつ、それでもよい年になりますようにと願う帰路につく。



【志賀島方面の眺望】



【シーホーク 35 階より望む福岡市街】



【福岡タワー方面を望む】



【2001 年に百道浜で開催された「中世博多展」より】

自
選
句

(二十)二十五)

自選句 二十

「平成十九年十二月投句」より

棧橋の北風に寄り合い船を待つ
極月の昼の号砲海峡に
壇ノ浦冬の漁船小旗立て

真理子



暮早し宿へのバスに乗り遅れ
寒風に干上がる鮫の音たてて
寒風に干されし鮫の眼の光

佳与子

冬日濃し長府城下の骨董屋
枯芝に影の伸びゆく風見鶏
転職の娘の落ち着きし年を守る

由紀子

戸の閉まる音空耳か冬館
冬鳥のしきり陶工窯を開け
航路指す灯の点滅も冬の海

光子

墓碑銘も幽かとなりて散紅葉
凍て星の光降り来る我が掌にも
大根の端端しきを齒に当てむ

聖子

本州へ小船で渡る年忘
竹爆ぜる音して社年用意
九州へ帰る渡船の古暦

節子

「平成二十年一月投句」より

二組の梅の先客茶屋床几
引き当てし大熊笹に人寄り来
講を聞く畳たたきて煤払ひ

佳与子



初恵比寿袋に入らぬ大当り
太刀打ちのできぬ俳論梅探る
皆カメラ向けし冬日の白牡丹

由紀子

無職とはなりし朝の寒卵
福引の声の祝詞の重なりて
ひょうたんのお守りも古る梅探る

光子

静謐と云うべき雪の朝かな
寒灯や山灰青く光りけり
寒卵炊き立ての白飯あれば良し

聖子

口上に佇つ曳猿の浮かぬ顔
気の乗らぬままに曳猿宙返り
抱っこされ猿回し見る犬もいて

節子

誰が捨てし井原西鶴読み初むる
のら犬か乳ぶき垂らして冴え返る
寒卵ひとつふたつを借りもして

真理子

自選句 二十一

「平成二十年二月投句」より

街中に赤きランタン寒明くる

四温なる画廊喫茶の水彩画

冴返る風吹き溜る古墳穴

下萌ゆるふと人泊めて話したく

冬鷗浮かぶも飛ぶも自在にて

アルバムを繰る手を止めし春の雪

春隣大いなる虹立ちにけり

段々に声の高まる鬼やらい

叡山の見え隠れして雪しぐれ

ハンゲルの文字流れくる春の浜

枕木の間まばらに下萌ゆる

行きずりの人と見上げる春の虹

ひとすじの煙苔屋に下萌ゆる

立春の虹つき抜けて汽車のくる

近づきし所にはなく梅香る

東京に集う約束春隣

直球もカーブもありぬ年の豆

犬ふぐりどちらが好きときかれても



由紀子

光子

聖子

節子

真理子

佳与子

「平成二十年三月投句」より

豆の花観世音寺の道細く

一合の白魚売ってもらいけり

春の野やパピヨンの尾の真白き

草青む河畔に雨の強かりき

雨いつか名残の雪となりて降る

身籠りし人思ひつつ雛飾る

葦の角川原遊びはまだ続く

慣れた手で魚追い込み葦の角

白魚の一日上らぬ漁小屋に

漁小屋に声かけてみる春炬燵

白魚の生簀浮きある室見川

いつまでも連れ添う母のお雛様

春風や旅人として今ここに

この路地に師と立話落椿

鶉の嘴の引きあげしもの春の川

人影の動けば散りし柳鮫

菜の花の畦に積まれある捨菜

営業の森育てる春の雨



光子

聖子

節子

真理子

佳与子

由紀子

自選句 二十二

「平成二十年四月投句」より



車窓より見し夜桜の皓皓と
マラソンに蜂乱入のニユースあり
春愁や一つ大きな息をして

聖子

ぼんぼりも屋台も人も花の中
園児らを待つ花屑を掃きながら
かけ上がるらせん階段花の屑

節子

仰ぎ見て振り返りもし桜狩
引越しのトラック花に荷造れり
からたちの花咲き初めし屋敷町

真理子

バス降りてすぐに公園風光る
チューリップ赤より白の咲きそうな
身投げする螢鳥賊とや砂浜に

佳与子

シャボン玉吹く子浴びる子花の下
足立嶺の稜線ま近花筵
春風にクロワッサンを焼く匂い

由紀子

螢鳥賊光ると知らず山育ち
わずかなる甘味椿の花の芯
久女碑に散り初む山の桜かな

光子

「平成二十年五月投句」より



上下線同時発車の遍路駅
幸せは大山蓮華の花の中
まっすぐに天を目指して麦熟るる

節子

過ぎしこと再び夢に明易し
さくらんぼ啄ばむ雀入れ替わり
山中に施設静もる桐の花

真理子

この辺りケーブル交差夏蕨
まくなぎの煙のごとく湧き上がり
三つほど小橋くぐりて夏燕

佳与子

賽銭の苔にこぼれてシャガの花
初夏の日差し寝釈迦の足裏に
山越えの道広くなり遍路宿

由紀子

取材慣れせし女将出て夏蕨
鍛冶の研ぐ刃先の光り夏に入る
念仏を五月の山に唱えけり

光子

母の日や気遣ひさるる身となりて
名物の大筍にかぶりつき
薫風やきりりと晴れし由布の山

聖子

自選句 二十三

「平成二十年六月投句」より

梅雨川の水門今日は閉じてあり
一頭は栗毛の子馬初夏の風
最終の船着く波止に夜釣かな

真理子



夏落葉動きザリガニ釣れてをり
朝顔の蔓の這いゆく鳥居かな
参道の軒先どこも燕の子

佳与子

着陸の近し真下に夜釣の灯
水に浮く餌にかしまし梅雨鴉
近江路の宿に荷を解き時鳥

由紀子

宮島の灯り標に夜釣かな
田に通ふ水路たりきと真菰生ふ
焼け残る去年の蘆原行々子

光子

通販の葉山ほどさくらんぼ
そよそよと風さやさやと鳴る真菰
明け易し旅の枕の合わぬまま

聖子

船旅の果ての四国や明け易し
九州へ出航を待つ夜釣の灯
萬緑にひときわ高く松山城

節子

「平成二十年七月投句」より

観覧車無人の箱を梅雨空へ
緑陰のあればオウムの籠吊られ
病室に祭囃子のきこえきし

佳与子



白南風にテニスの少女一人打つ
猿山の竹揺らす猿南風吹く
磯路地を急ぐ男や鮎の皿

由紀子

日の盛り猿吼えさせてみたりけり
園児らに厳しき声も炎天下
満足の一日終えし夕焼かな

光子

我が顔のよそよそしくてサングラス
踊り子の汗のしづくに櫓の灯
葛餅の店ありて古り本門寺

聖子

石菖を庭に育てて睡まじく
鯖鮓をご馳走になり匂に馴染む
里の子の立てし滝への道標

節子

梅雨空へ音なく上る観覧車
緑陰にアクアマリンのオウムの眼
押鮎の思い出染みる古木型

真理子

自選句 二十四

「平成二十年八月投句」より

足少し引きずる母や盆の月
噴水が好き濡れるのが好きな子等
退院の笑顔にビール飲み干しぬ

由紀子



日盛りに人力車夫の待ちぼうけ
背負籠を汽車の通路に秋立ちぬ
秋立つや索ぜずともに甘えをり

光子

廊下にも夏期講習の楹貼られ
包丁を当てるやいなや割れ西瓜
細き火の息する如く芋殻燃え

聖子

入道雲同じ角度に傾いて
揚花火双眼鏡に入りきらず
夏休み特急通過に拍手の子

節子

怖れるし子もびしょ濡れに噴水に
小雀のてこずっているいぼりむし
篠竹のさ揺れかわして秋の蝶

真理子

海の青少し透けるし日除けかな
卓寄せて女四人の昼寝かな
貯水池にかかる石橋合歡の花

佳与子

「平成二十年九月投句」より

自転車屋結構繁昌秋暑し
綱雲拾ひしボール投げ返し
家守る嫁とし吾亦紅生けて

光子

男には似合わぬ絵柄秋扇
干し芋茎薄く緑の色残し
秋暑し忘れ置かれし上着あり

聖子

対岸はいまだ残暑の中にあり
六艘のボート繋がれ流れをり
秋扇父の名前が書いてあり

節子

二度目とは萩のこぼる、高台寺
男山近くに見えて竹の春
片羽を扇の如く開く鴨

真理子

庭先に月見の椅子をふたつほど
緋鯉より真鯉小さく池の秋
露草のうすむらさきの雫かな

佳与子

たばこ屋を曲がれば路地の秋の風
杖失せし空也立像秋の蟬
走り根の陰より動き穴惑

由紀子



自選句 二十五

「平成二十年十月投句」より

底深く河口流れ出る秋の潮
秋祭り献上帯の徒歩参り
秋蝶の飛ぶといふより流されて

聖子



気がつけば雲みな消えて秋の空
繩はつてありし流鏑馬秋祭
猪の歩いたらしい山道を

節子

雲割れて谷の舞台へさす秋日
問いかけに無言小鳥の声降りて
ここにまた釣舟草の濡れており

真理子

ごんずいのひげを数えて水の秋
小走りにきては鶴の立ちどまり
迷うことなきコスモスの迷路かな

佳与子

釣糸の先見えている秋の川
潮引けば渡れる島や新松子
秋晴れやドジョウ動かぬ水の底

由紀子

小屋掛くる薩摩ことばや秋祭
コンビナート灯りに白き十三夜
月の波月の砂漠を歌ひつゝ、

光子

「平成二十年十一月投句」より

神官に切ってもらいし鹿のえさ
丈低きままにひつじ田黄葉して
潮千けば竹瓮仕掛けに来る男

節子



宝満山五合目までも時雨雲
餌のすみし鹿それぞれに戻る場所
かりそめの行者姿の時雨れ行き

真理子

まげに挿すかんざし二つ七五三
がさごそと動くものあり竹瓮揚ぐ
大菊の籬のゆるみをしめ直す

佳与子

栗の毬隅に積み寄せせ山の家
背山よりひきし湧水今年酒
明らかにかに我にある非の冬の雲

由紀子

爪立ててみし橘の香の強く
秋茄子の採られぬままにくねりたる
ダマイ・ラマ冬めく街に朱の衣

光子

傘一つ時雨来し身を寄せ合って
犬難儀取っても取ってもいのこずち
初冬や勤行の僧凛として

聖子

あとがき

最近の経済情勢の急激な悪化は、米国の不動産・金融バブル破綻を端緒とし、程度の差こそあれ誰しも何がしかの影響を受けている。バブル現象の起源は、十七世紀のオランダでのチューリップの球根の珍種・希少種高騰への投資による「チューリップ・バブル」、語源としてのバブルは十八世紀のイギリスで、南海会社という金融機関が引き起こした投機、株価急騰・暴落、経済大混乱に陥った「南海泡沫事件（South Sea Bubble）」と言われている。これら過去の史実や記憶に残るバブル経済の崩壊は、経済学者、政治家、金融のプロをしても阻止しえず繰り返す。経済理論を越える人間の持つ心理的熱狂が背景としてあるのだろう。

こんな中、最近売れっ子の脳科学者である茂木健一郎氏のフレーズをネットで見かけた。

■バブルは脳を活性化するメカニズムとそっくりで、必要なのは、この一瞬の盛り上がり

■自分の中で興味の対象に対しバブルを起こし、それに向かってドーンと一気に情熱を高めて行く
くと情熱がおさまった後も、興味は静かに続いてゆく、これが何かをやり続ける原動力になる
■瞬間的な盛り上がりを何度も繰り返すことによって、我々は「気づきの階段」を登ってゆき、
ずっと残像は自分の中にある 等々。

「あしや句会」の皆様においては、「俳句脳」にバブルを起こすことによる一瞬の盛り上がり、ひらめき、引き続き静かな創作意欲、等が吟行句会における原動力になっているのではないのでしょうか？
そして、今後の句作活動においても、引き続き「花鳥風月バブル」に期待し、編集後記と致します。

ホームページ・編集担当



響 風—Hibiki Winds—

あしや句会 第4号

平成21年2月発行

発行人：江本 由紀子